通心１７９号　　令和２年３月１８日

昨日は久々の６限までの授業でした。また、久々の部活動もありましたね。ケガに気を付けて、安全に活動できましたか。新型コロナウイルスの影響で、スポーツや各種イベントのほとんどが延期や中止になっており、部活動の大会等も中止になったものもあると聞きます。中には、目標としていた大会が中止になってしまった人もいるかもしれません。まだまだ先行き不透明な状態が続くため、見通しをもつのが難しいですが、そんな時だからこそ、意識して解釈をプラスにしようとしてみるのも大切かもしれません。

疑問をもつことが人生を面白くする

疑問を持つことは、人生を面白くするうえで欠かせない要素である。

そもそも世の中には不思議なことがたくさんあるのに、疑問を持たなければそれらを不思議だと感じることさえできない。

「地球は丸いのになぜ南半球の人たちは落ちないのか」とか「羽があるのになぜ鶏は空を飛べないのか」とか、こんな疑問は大人になると消えてしまうが、大人になっても抱き続けた人が学者になったり、ずっと夢を諦めずに追いかけていたりするのかもしれない。

子どもの頃、イソップ童話の「ウサギとカメ」を読んで、「なぜ野原を駆け回るウサギと水中を泳ぐカメが競争なんかしたんだろう？」と疑問を持った少年は、大人になって加藤諦三という著名な心理学者になり、その疑問に答えを見出している。

「疑問が大事」とは言え、それには二種類あるように思える。一つは、たとえば「なんで古文を勉強しなくてはいけないのか」とか、「数学の方程式なんて要らないんじゃないか」というような、嫌なことを拒否するための疑問である。好きなことだけをやって生きていきたい人は、こういう疑問を抱きやすいが、結局自分の好きなことを見つけられなかったりする。

もう一つは、冒頭に述べた「人生を面白くする疑問」である。それは大方、好奇心から発せられる。好奇心を持ってさまざまな世の中の不思議に疑問を抱くと、何事も面白がれて、楽しい人生になるのではないだろうか。

そういう意味では本屋さんは面白がる人たちが集う「知的アミューズメントパーク」だろう。お目当ての本が決まっている時はネット通販も便利だが、それはただの「買い物」だ。本屋さんはお目当ての本がなくても、ふらっと立ち寄るだけで、「面白そう」という好奇心の種がいくつも芽吹くから堪らない。

『日本講演新聞』より

この記事に登場する加藤諦三さんが心理学者となって出した結論はこうです。まず、ウサギはなぜ「もしもしカメよ、カメさんよ」とカメに声を掛ける必要があったのか。ウサギ自身が仲間と上手くやっていれば、わざわざ足の遅いカメに声を掛ける必要はないと思うとのこと。つまり、「ウサギは仲間とよい関係を築くことができていなかったのではないか。そして、ウサギ自身、自分のことが嫌いだったのではないか」と加藤さんは考えています。だからこそ、競争する必要のない、そして勝てると分かりきっているカメに声をかけたということです。一方で、声をかけられたカメも「私は水の中で生きるカメです。野原を駆けるウサギじゃありません」と言えばいいにも関わらず「何をおっしゃるウサギさん」とウサギのペースに乗っています。加藤さんいわく、カメも自分のことが嫌いだったのです。つまり、この物語は、自分のことが嫌いなウサギとカメが競ったり張り合ったりしている物語である、と心理学的には読めるそうです。一つの物語であっても、様々な視点で捉えてみると非常に興味深いです。もしかしたら、今自分自身が抱いている素朴な疑問が、将来の自分の仕事になっているかもしれませんね。